

研究ノート

いわゆる近代経済学とリカード

見野貞夫

人を含めて自然に人間がどのようにたち向うかは、もっぱらその人間が何でありいかなる発展水準にあるか、同じことであるが、かれらの相互関係がどうであるかにより決まり、それを生きいきとうつしだす。人間が何であるかはかれらが何をつくるかによって定まる。一口にいて、対自然の関係は人びと相互の関係を反映する鏡である。迂回生産の構造とふかさは、直接生産の性格によってきまり、これを代弁する。これとまったく同様に、他の諸理論をどのようにとりあつかうかは、そもそも自己の理論水準が何であるかを、さけがたく忠実に物語る。経済学史研究の内容は経済理論水準の如実な弁明である。公害が一見そう思われるように、自然と人の関係ならず、人びと相互の特定関係に内在する現象であるのと同じように、経済学史も、理論材料の加工作業ならず、加工をほどこす作業者としての自己の経済理論の表現である。両者は相互に高め合いながら、^① 学史研究は理論水準を検証する恰好のスペースである。

対自然への関係と人びと相互の関係、迂回生産と直接生産、二側面のこの関連に特有な性格は、経済学史研究と経済学理論の構成の相互関係についても、まったく妥当するであろう。

リカードというブルジョア経済学の最高峰をなすフィギュアを、一体、ソビエト経済学者がどう考え、解釈し評価しているかの一端をさきに紹介し、

① この相互関係については、社会主義経済学の構築にしぼって、拙著：『社会主義経済学研究序説』（フタバ書店 1969年）のあとがきで述べたことがある。

この国の科学水準を判定するよすがとしたのであるが、同じ問題意識をこめた作業を、今度は、そのリカードをいうところの近代経済学が解説・展開・判定する状態をソビエト経済学者がそもそも、いかに反論し再批判を加えるかのソビエト文献のうちに確定してみたいのである。近代経済学を通じてのリカードの位置づけがここでの紹述対象だということになる。

もともと、マルクス経済学の展開と、近代経済学の批判はソ連の諸文献では不可分の一体をなして、経済学システムの一環にくみこまれている^②。この二側面的作業がリカードをめぐるであられた結果を、本誌前号と当号でとりあげるのである。あるいは、ストレートな自己主張としての理論と、他者の批判を通してのネガティブな同じ自己主張の二側面を、さきのように理論展開と学史研究とするならば、本誌の二小文は、リカードにしばって学史のなかに再生した二側面にかかわるものだといいかえてもよいだろう。

ソビエト経済学の科学水準は、リカード解釈論を検討することによっても明らかであるが、そのリカードをそれなりにいろいろと注釈・解説した近代経済学の批判のなかにも、さらにいっそう具体的に鮮明になるであろう。

ここで紹介するのは：П. Заррин : Теория стоимости Рикардо и ее современные буржуазные интерпретаторы, Экономические Науки, No. 2, 1973. である。

理論家としてのリカードの容貌を、ザルリンは次の二点に求める。第1、明確な階級的志向、第2に、科学的客観性。リカードはイギリス産業資本主義の必要とした政策に基礎づけを与えたのだとみている。

さしあたり、しばらく以下、ザルリンのリカード論をフォローすることにしよう。

かれの理論システムの基礎は労働価値説であり、これに立却して、かれは資本制生産の内的分析において大きく前進をとげた。スミスは、科学的な分析と、現象の一般化の間を動揺したけれども、リカードはつねに、現象が起

② ソビエト経済学界のブルジョア経済学批判については、その一部をわれわれは検討したことがある。『近代経済学と社会主義』（奨文堂、1968年）を参照。

点命題と一致したり矛盾したりする程度が一体どのようなものであり、いかほど外的現象形態が背後に伏在している内的関連やブルジョア社会の本性と一致しているかの問題をばすどく提起した。リカードはこの問題の矛盾を解決しようと図った。「ここにこそ科学としてのリカードの偉大な歴史的意義が存する…」更に、マルクスは、リカードと先人たちと比較して、こういった。すなわち、「そしてついに、かれらの間にリカードがあらわれ、科学に向って“止れ!”と叫ぶ。ブルジョア体制の生理学にとってその内的な有機的関連、その生命力ある過程にとっての基礎なり起点は労働時間による価値規定である」。マルクスがいうように、労働価値説を徹底して守ることに、リカードの、歴史の発展する根基である階級対立の見方が結びついている。賃金を、歴史具体的条件に依存した労働者生存に必要な生活手段の価値と考える。が、この価値からの背離は例外どころか通則である。賃金が商品価値にうつしだされるとみる見解をかれは一貫して批判し、この場合、変化するのは利潤であって、商品価値の大いさにはかかわりはないと主張する。リカードの利潤率低落論に、マルクスは大きな意義を付与する。リカードがほかの経済学者に、利潤率低下を吹きこんでひきおこした恐怖は、マルクスによると、資本制生産の永遠ならざるかれのほのかな意識を明瞭にする。資本主義社会の起動力たる利潤率やその状態はたんなる理論問題として観察するわけにはゆかない。「このことの一つの可能性ですら、リカードを不安がらせる事実、資本制生産方法を、かれがふかく理解したことを、正当にも証明する」。

リカードの理論システムの一環として地代論がある。地代とは土地のたまものだとする所見をすてて、リカードは地代を、農業において労働がつくりだした価値の一部分と考える。だが価値形態論を研究せず、商品生産労働がもつ二重性格を理解しなかったので、かれはこの法則の作用がいかにかモディフィケーションをうけるかを把握しそこなかった。このことは、労働価値説をもって、平均利潤の成立する現象を説明させずじまいにしてしまった。

リカードの最大の欠陥の一つはといえば、労働者を“労働”という商品の

販売人としている点だ。このことはさげがたく、不払労働の領有がいかにして、価値法則と完全に両立するかへの理解の道をとぎすことになった。賃金が生存価値ギリギリに帰着するというのは、ほかでもなくマルサスの人口法則に立却しているためである。リカードに広汎な批判を加えるマルクスにしても、他面、かれをきわめて高く評価する。その一つが労働価値説であり、このために古典経済学の完成者と呼んで賞賛するものである。

だがしかし、これに反して、現代ブルジョア経済学はリカードのこの功績を忘却してしまう。労働価値説の意味を素通りして、たとえばケインズは、かれの理論システムの特質を、総需要関数を軽視するものと論断する。だから、ケインズの意見では、リカードの影響の下で経済学は有効需要の問題を無視して、ひいてはその発展に有害な結果をもたらしたのである。

理論家としてのリカードに、こうした明白な軽視として相関連するのには、現代経済学者サミュエルソンの建造物がその一つにあげられる。サミュエルソンはリカード学説中の一つ、比較生産費の原理だけを積極的に評価する。アメリカン・エコノミック・アソシエーションの席上、かれはリカードの役割が過大評価されている点、だが、理論的発見により経済学をゆたかにした点を強調する。リカードの価値論を分析することなく、こうした長談義にかれは終始するのである。スキャンダルな出来事として、次の事実つまり、リカードのいちゃつきについて、労働価値説とそれからの背離をもって、インキで修正するかわりに、かれの読者は、これを根拠に果実ゆたかな思想家と考えたのである (P. Samuelson: *Economists and the History of Idea The American Economic Review*, vol. LII, No.1, [March 1962], p. 9)。サミュエルソンは、リカードがもつ歴史的意義に直接に回答するのをさけて、「かれをストレートな線で追求する自由主義経済学者たちの、また資本主義のマルクス主義的批判家のお好みの人になったのだ」と、リカードを特徴づける。たしかに、リカードの見解のすべてがすべて、科学的であるはずもない。俗流の見解もかなり多いが、その役割を正確に科学的に評価しようとするならば、かれの理論システムの本質からまずもって検討してかか

らねばならない。

リカード労働価値説へのブルジョア経済学者の黙殺的な態度は学史の諸作品のなかでとりわけ鮮明になる。キール大学のシュナイダー教授は、理論の歴史に関する著書で、リカードは価格論でささやかな位置を占めるべく分りふられているとして、かれを巨大な経済学者のひとりに数え、すぐれた分析力をみとめるものの、同時に、「ハッキリしない知性」について語り、リカードが労働価値説に普遍的意義を与えたと非難し、つづいてかれを、俗流生産費論の支持者のひとりに仕立てあげるわけである。リカードの基本的作品には「比較的弱い相互間に個々の特質が集合したもの」と、シュナイダーは断定する (T. Schneider : Einführung in die Wirtschaftstheorie, Tübingen, 1970)。またリカードが労働価値論者だということを否定すべく、ブルジョア経済学者はひろく、リカード叙述の個々の欠陥、経済学の重要問題を解決する能力のなさを利用する。こうしたところみとしてコロンビア大学のスティグラー (G. Stigler) 教授の鳴ものいりの論文つまり「リカードと93%の労働価値説」 (Ricardo and the 93% Labor Theory of Value) が明白な実例として役だつ。この論文は、リカードがはたして労働価値説の論者であったのか——商品の相対価値がそもそも生産に必要な相対的な労働量でもっぱら規定されるとかれが考えたかどうかという問題からはじまる (*The American Economic Review*, vol. XLVIII, No. 3 [June 1958], p. 357)。

リカードは『原理』第1章第4節において機械や他の固定資本が価値に与える影響を考えつつ、固定資本のウェイトに応じて、価値からの背離が6~7%だという結論に到着した。この規定をスティグラーは、労働価値説からの離脱と考える。たしかにリカードは問題を解決できなかった。だから資本の有機的構成の差異の意味を検討して、リカードの不満足な解決手法を批判しながら、同時に解決に近づいていることをば、マルクスは強調したのである。しかしスティグラーにとって論証すべき大切なこと——これは労働支出がリカードにとって重要ではあるが、唯一の価値決定要因ではないという点

だった。リカードの弱点につけこみ、リカードの見解をゆがめるが、平均利潤法則と価値法則との間に、リカードは矛盾を感知した。この矛盾をマルクスは解決した。そして資本主義では、価値は生産価格というモディフィケーションをうけた形態であられることをかれは示した。リカードが価値法則からの例外が存在すると指摘したのにつけこみ、批判の口実を与えられて、労働価値論批判家たちはかれを生産費論者とみなしてしまった。こうした議論の仕方はブルジョア諸文献で普及しており、そのひとりがロビンズ (L. Robbins) である。1970年に出刊された論文集では「現代経済理論の展開」という一文があげられよう。そこではリカード理論に多くの注意がさかれていて、ロビンズは、リカードの理論システムは論理的であって、経済学研究の方法論で重要な役割をはたしたことをみとめるけれども、リカードの到着した結論には不満足を表明する。とくに需要と効用へのリカードの見解はあてはまらず、かれによると、限界革命後では、効用の価格形成への影響は否定できないものになっている。そして、リカードは労働価値説の論者ではないのだともいう。

一見しても、エール大学のブローグ (M. Blaug) 教授は Radical Political Economy のなかでちがったアプローチを与えた。リカードの理論欠陥にかぎらないで、ブローグはリカード理論がイギリス経済学の発展にどんな影響を及ぼしたかを明かにするべく、そう問題をたてた。ブルジョア経済学の古典とその後継者を比較しながら、かれは、リカーディアンズがコトバの上において師の理論を主張しはするが、真の内容をゆがめたのだと考える。また限界分析論者のリカード評価に否定的に処遇するが、ブローグによると、限界革命のプリズムを通してのみ、古典経済学をみようとしようものならば、それは基本的に粗雑な誤謬の堆積としてあらわれるだけで、何の意義をはたさず、提起された問題そのものすら堅持しない (M. Blaug: Ricardians Economics, New Haven 1958, p. 4)。リカード後継者によるかれの理論の再検討をうんぬんするさいに、古典経済学の危機が階級闘争の尖鋭化と関連しているといったマルクスの評定をブローグが引用しているように、

個々の場合、ブルジョア経済学者はこのようにして、リカードの科学的遺産にたいして否定的なブルジョア経済学の態度を決定したところの現実の事項をばみとめはするが、大方のブルジョア論者とひとしく、ブローグもリカード理論の本質を歪曲して、リカードの最大のメリットが労働価値説にあったことを否定する。

労働価値説を、ブルジョア経済学者は限界効用を通してのみ考え、これに評価を加える。資本制生産の経済関係を研究することを、物体と孤立主体の関係をもっておきかえ、限界論者は消費者心理に注意を集中して、理論の見解システムを、“限界効用”にもとづいて構築したり、資本制生産の全メカニズムを説明することのできない“限界生産力論”にもとづいて、“三生産要因”の理論を蘇生させようところみたが、これも役だたなかった。リカード学説の俗流化、とくに労働価値説については、新古典派理論の代表者たち、何よりも自分をリカードの後継者と弁明するA. マーシャルがこれをはたしつづけた。限界効用を否定することなく、かれも価値を効用と生産費の二つの独立した要因の合成とみるべしと提案した。折衷主義に大きな重みをもたせるために、かれはそれを、リカード見解のいっそうの発展と結びつけた。とりわけ、かれはリカードを生産費論者としてえがいている。マーシャルがどう思おうと、自分をリカードの後継者とするのあてはまらぬことは若干のブルジョア学史家、たとえばシュムペーターもみとめるところ。シュムペーターによると、マーシャルはときとしてリカードの基本的諸規定を分析し、労働価値説を變形、そしてリカードのとは似ても似つかぬものにしてしまった (J. A. Schumpeter : A History of Economic Analysis, 1961 London, p. 92)。またレーマンにしたがえば、1890年にマーシャルは『原理』を発売して、価値論がブルジョア文献で中心的テーマである状態をやめる発端を与えた (H. Lehmann : Grenznutzentheorie, 1968 Berlin, S. 318)。現在でもブルジョア経済学には限界効用が起点であり、マジナリズムに明白な貢献を与えたのはケインズである。かれがブルジョア経済学に影響を及ぼしたのは『一般理論』の起点概念、たとえば消

費性向、流動性選好などの心理学的範時にとどまらない。ケインズ理論は規制資本主義論の基本的潮流になった。というのは、かれは社会的再生産の若干問題に注意を集中して、不均衡を除去するからには、市場メカニズムの存しないことを明らかにみとめたからである。

ブルジョア経済学が価値論にみとめる第二義的意義はテキスト構成からも明白であり、たとえば1911年、ハーバード大学のF. タウシグの『経済理論の基礎』中で価値問題に、九章から成るI部全体がわりふられていた。ところが、いまサミュエルソンの教科書においては価値論はもう独立のテーマとしてはない。価格形成問題でかれが第一に考えるのは需要供給の法則である。需要は、かれによると限界効用により、そして供給高は限界費用によっておのおの決定される。読者には、マーシャルの見解を本質的に反芻しているにすぎない明白な限界概念がもちだされるだけである。古典経済学を特徴づけるサミュエルソンの安直さは、内容的にいて、スミス批判を与えた「価値のパラドックス」といったタイトルの小パラグラフに登場するのみだという点にある。使用価値と交換価値を区別して、スミスは効用が価値の基礎でないと結論した。この結論を問うて、サミュエルソンはリカードが“国富”というコトバから自分の作品をはじめたことは思えぬという。だが、リカードはスミスにつづいて明確にいった。効用は価値にとって本質的に不可分だが、その尺度ではないと。

69年、イギリスで『生産分配の新古典派理論』を、アメリカでは『ミクロ経済理論』をファーグソンは出刊したが、そこには価値という用語はない。あるのは、消費者行為を説明して、経済学者は効用理論から選択理論に移行すべきだということだけである(C. Ferguson : Microeconomic Theory, Homewood 1969, p. 25)。総量を取扱うマクロ経済学は現代ブルジョア経済学で主要な位置を占めているとはいえ、全理論構成の起点になるのは、個々の経営体と、その性向なり評定である。それゆえに、限界効用はなおブルジョア経済学者の起点である。限界手法からブルジョア経済学が離脱できないことはスティグラの The Theory of Price, Homewood 1969

に明白であって、かれ自身、ブルジョア経済学の現状を大変に楽観していて、経済学がほかの社会諸科学にくらべて、恰好のよい、論理的に一貫した理論規定のシステムを展開してきたし、また論理的明証性と経験的論証の水準も高まっているという。だが、もっとさきの叙述ではそれほどでもない。つまり、生産構造が資本主義経済で一体どのように決定されるのかの問題に答えていう。必需品の選択自由があり、この選択に反応する生産システムの存するわが国では、この課題は消費者によって個人的に解決されるのだと。だが、消費者主権はブルジョア経済学内部から批判にさらされる。正当にも、かれは消費者を資本制生産の審判法廷とするのはこっけいだと考えた。

消費者をまずもって案出するスティグラーは、同時にブルジョア経済学発展の過程において限界効用に関する多くの理論規定があてはまらぬものとして脱落したことをみとめざるをえなかった。たしかに、生成期に限界効用論は、さまざまな欲求の充足度合を、異となる物の量で測定できるということから発足したのだけれども、ここ何十年の間に事情は変化したという。心理（快樂）の理論はますますもって批判をうけ、効用の役割分析がち密をきわめた（とくにパレート）。人がここにみた効用の度量や比較、国家の政策のために供給を基礎づけるのに効用を使用すること——こうした課題を部分的なり全体的に拒否するようになり、合理的消費者と名づけられる概念だけが残った。

ブルジョア価値論がいかにカモフラージュをととのえ、非科学的な形態であらわれようと、その非成立と弁護論性格は明らかであり、マルクスの批判の最重要な課題であろう。なおアクチュアルな課題として眼前にあるのは、現在普及しているブルジョア価値論の全面批判である。そのための基礎として、マルクスの価値論がある。とくに『資本論』第3巻50章「競争の外観」は貴重な材料。この章では、実際にあらわれる価値の具体的形態が特徴づけられる。

価値が市場価格に照応し、不変の条件で再生産され同一比率で創出された価値が賃金・利潤・地代に分配されるとマルクスは想定する。価値分配と生

産価格の規制こそ資本主義の基礎であって、競争をともなって作用する。分割される価値が恰も構成される外観をもつために、真実の運動理解はそれなりにゆがめられる。企業者にとり価値の決定はいつでもよい。その決定は、かれの生産費の高低を決定する要因としてのみ意義があり、それが補填要素に一致するかうわまれるかに応じて、企業者所得は一定か上昇することになる。『剰余価値学説史』でマルクスは次のようにいう。俗流理論や資本家—実務家は、所得を商品価値で、価格を所得で決定するなど、誤論におちこんでいる。さまざまな独自形態への剰余価値の分裂、いろいろな理由から人びとへのその帰属、生産・実現の条件の矛盾——すべてこれは神秘化にみちびく。分解する価値の一部分が転化して独立の要素になり、市場価格の構成因にもなる。一見したところのこの独立性は実際、内的法則によって決定されているのであるから、生産過程モメントの一つとしてたちあらわれることもないし、決定的に作用もしない。まさに逆だと。

ブルジョア経済学者は、スティグラーと同じく、好んで次のことを力説する。すなわち、自分の結論は明白な真理にもとづくものであって、価格が上がると需要は減少する。各種商品の需要弾力性はさまざま。同じような公理にもとづき、これは市場メカニズムの作用する外的形態についての表象を与える。だが大したことはない。企業者が関心をもつのは販売価格と生産費の差額であって、価値でもないし剰余価値でもない。マルクスは客観的法則が生産関与者の意識の下では、ゆがんで現象すると指摘する。このゆがみの表象は現実に根基のないものではない。俗流経済学はこの表象を一般化してしまうのであるが、このことは、資本制経済のもとで生じる行為を考慮するものの、それを説明できないことを意味するわけである。

リカードの歴史的功績は、資本諸関係がすべて価値法則にもとづくと考えたことにあった。その具体的機能はリカードの知らず解明できなかった点だが、これをマルクスがはたした。価格は価値の貨幣的表現だというのは価値性格を明らかにするが、これは価値からの背離を許さぬことをけっして意味しない。価格形成は複雑。マルクスの価格論も需要供給の価格への影響を無

視するものではない。

価値論に立却する理論システムの創出を拒否するのは、とりも直さず経済分析を表面上にかぎって、内的関連の認識を拒否することである。いかに詳細な統計データも、どれほど正確な計算も経済発展の基本問題に正しい回答を与えない、ブルジョア経済学の価値論からの脱却は進歩ならず退歩を示す。ブルジョア学史家はこれをみどめようとはしない。むしろ、ブルジョア経済学史が新発見でゆたかになってゆく過程として、楽天的にえがきだす。その一史例がブロンフェンブレナーの『経済思想の革命』である。(これを“学史評論”〔History of Political Economy, vol 3, No.1, 1971〕に発表)。かれの立場からすると、経済学の歴史に三つの革命があった。1. レッセ・フェールの確立 2. 限界効用の普及 3. マクロエコノミック理論 こうした問題のたて方はほかでもなく、かれには時代区分に関する科学的基礎が欠落しているゆえんをまざまざとさらけだすものだろう。たしかに、自由貿易思想の普及は経済政策に大きな変化をもたらしたが、こうしたとらえ方ではブルジョア古典経済学の役割を鮮明にしえないし、価値論の理論的メリットを証明もしない。かれはこれにふれずに素通りしてしまう。第二の革命は労働価値説に反対する理論的武器の開発に結びついている。かれは、経済学がどのような方向に発展し、将来におけるその展望は何かをみ定めようとしている。次の総合はそもそもいかなるものか、いつそれがあらわれるかを私は知らない。将来、総合があるということすら確信がもてないのだと。オプティミズムに貫らぬかれた経済学史を、不断の“革命的”過程としてえがきだすことが、未来のその展望をふかくペシミスティックに評価することにたちいたっている。さらに、経済理論の現状に不満をもらし、将来の不安をハッキリ表明するのにブラウンがあげられる。かれはイギリスのロイヤル・エコノミック・ソサエティの会長である。経済理論の好評を博している部門、たとえば成長モデル、計量的分析、決定採択論などを、現代資本主義社会における未解決の経済社会問題の尖鋭化と比較しながら、科学誌は実際問題を解決しない、けだし、理論シェーマが現実と切断されているからだという。そして、一定

政策を導入するに責任を負う人は、この政策がもとづいている関係や諸比率を決定するにあたり、計量経済学者が開発したシェーマを信じないと (E. H. Phelps Brown : *The Underdevelopment of Economics, The Economic Journal*, vol. 82, No. 325 [March 1972], p. 2)。ブラウンによると、経済学者は第一義的意義をもつ一連の問題、たとえばイギリス工業の立ちおくれの原因には答えない。失業者と賃金動向との間にある依存関係についての理論的結論は正当化されぬ。正確・ち密な理論構成、複雑なモデルと、現実問題を分析しその解決手段を提供する能力の大して進歩しないことは矛盾する。社会的、文化的、政治的関係から孤立しては、経済問題も何一つ解決できるはずはないと。

マルクス主義を、世界文明の発展する基本道程からそれた宗派的学説とえがきあげようとするところみを暴露して、レーニンは、マルクスの先行者がはたした役割を評価した。“もう一つの社会主義絶滅論”という論文中で、かれは、マルクス以前の社会科学を特徴づけるにあたり、まず経済学者が価値法則ならびに社会階級の基本的分化を発見していたことをもって始める。レーニンによれば、社会の科学をゆたかにしたのは18世紀の啓蒙主義者であり、かれらは封建制度や教会と闘い、そのなかで弁証法的方法を開発して、それを社会生活に適用しはじめた。この遺産を継承し、巨大な発展を画したのがマルクスなのであり、その理論はヨーロッパの歴史・哲学・経済学の最高の発展結晶であるのだと。リカードもその遺産をのこした最大富者の一人。

リカードは古典経済学者の完成者として、その遺産はマルクスのうけつぐところになった。マルクスとリカードの両人間には、一方がプロレタリアートの根本利害を代表するのに、他方はブルジョアのイデオログだったというかぎり、質的な隔絶が介在する。イギリスブルジョア経済学のクラシックとしてリカードに当然、値するものは、かれに返却し、かれを俗流経済学者と区別すべきだが、だが、かれがブルジョア理論家であった点を忘れないことが大切であろう。